

二 鏡に打ち向ふとき

「韓非子」に曰く「古之人目短自見、故以鏡觀面、智短自知、
ゆゑにみちをもつておこなひをたゞす。ゆゑにかゞみはきずをみるのつみなし。みちはあやまちをあかすのうらみなし。ゆゑにめはかゞみをうしなへばもつて
故以道正行。故鏡無見疵之罪、道無明過之怨。故目失鏡無
しゆびをたゞすなし。おこなひはみちをうしなへばめいわくをしるなし。じこしものじこ
以正鬚眉、行失道無以知迷惑」。自己を知る者は自己なりと云ふも、
徹底して眞實に之を見之を知るは、決して容易の業でない。云何しても鏡に
依り道に依らねばならぬ。私は此の鏡を見るに五つ態度があると思ふ。

不圖鏡に向つた時、人はどんな感じを起すであらうか。自己の面相其儘が
正直に明かに映し出された刹那、その刹那、先づ胸が轟くであらう。ハツと
するであらう。一種の軽い驚と怖とを懷くであらう。是れ正に自己を觀照
した態度である。然り鏡は本現在有の儘の姿を、有の儘に映し、有の儘に見
るべきものである。

姿を映し見るだけの鏡が、多く化粧の用に供せられてある。自己の眞相を
見やうとはせで、却て自惚を以て不美を糊塗せんと企てる。西洋の誰かは、
女一生の間に鏡に向ふ時間を計上して、何十ヶ月とかになると云つたが、夫
は殆ど全くお化粧をする爲なのであると。白粉下とか云ふものゝ其下に尙、
厚々と自惚と云ふものを塗付けて居はしないか。

夫が出來ねば努めて其の缺點を辯護にかゝる。目元は少なんだが口元が云
何とか。鼻恰好はどうぢやが頬恰好は何とか、引張つたり摘んだり、如何に
もして美點を見出さうと苦心する。年寄つて梅干のやうになつた婆さんは「皺
が寄つたのでない皮がたるんだのぢや」と云つたさうな。

愈それも及ばねば罪を鏡に擦つて了ふ。至つて不別嬪な若い女は「是は
鏡が悪いんだ、私の顔はこんなではない」と、鏡を大地に投付けたとか。
更に夫も出來ねば、自己の姿でないと、白々しくも映つた影を否定する。

幼おきない子こ供どもに鏡かぐみを見みせて「これは何處どこの子こ」と尋たづねたら「よその子こ」と答こたへたと云いふ。

世よは總すべて私わたくしの姿鏡すがたかぐみである。鏡かぐみは至いたる處ところに懸かけられて、私わたくしの姿すがたは至いたる處ところに映うつつて居をる。油斷ゆだんのならぬ世界せかいだ。野のにも山やまにも書齋しよさいにも街頭がいとうにも人ひとにも物ものにも、悉ことごとくく現實有げんじつありの儘ままの自己じこが發見はっけんせらるゝ。之これを究明きうめいせねばならぬ。